

畏申候。みちのほど（道程）べち（別）事候はで、いけがみ（池上）までつきて候。みちの間、山と申、かわ（河）と申、そこばく大事にて候けるを、きうだち（公達）にす（守）護せられまいらせ候て、難もなくこれまでつきて候事、をそれ入候ながら悦存候。さてはやがてかへりまいり候はんずる道にて候へども、所らう（勞）のみ（身）にて候へば、不ぢやう（定）なる事も候はんずらん。さりながらも日本国にそこばくもてあつかうて候みを、九年まで御きえ候ぬる御心ざし申ばかりなく候へば、いづくにて死候とも、はか（墓）をばみのぶさわ（沢）にせさせ候べく候。（以下略）

弘安五年九月十九日

日蓮

進上 波木井殿

御侍

所らうのあひだ、はんぎやうをくはへず候事、恐入候。